
おてんば恋娘達の冒険

ふぐるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おてんば恋娘達の冒険

【Nコード】

N6262J

【作者名】

ふぐるま

【あらすじ】

いつも一人。つまらない地下室。そこに突然やってきた貴方はだあれ？

フランとチルノの話です。

早く咲夜が来ないかしら。

誰も来ないからつまらない。

羽をばたばたばたばたばた。

飽きたわ。

もうおもちゃも無くなってしまったしお腹も空いたしお外に出たいし。

ドアの外を誰かが歩いてる。

メイドかな。咲夜かな。お姉様かな。誰だって良いわ。

私にかかればきゅっとしてドカーンよ。

私は手を握る。きゅっとして。

『どさっ！』

何よもうっ！

ああ目が逃げちゃった。

仕方ないから落ちてきた奴をきゅっとしてドカーン。

ああ気が晴れた。

あれ？ここどこ？あのおばさんは？

あたいはどうしてこんな暗いところに居るのぞ。

あたいが踏んづけてるこいつは誰？

お！おお！？

拳なんか突き出して。やろうつてのか！

こんな小さい奴がさいきょーのあたいに敵うわけが……。

さつき潰した青いのが元に戻った。

あれ？おかしいな。

「さつきあなた潰れたよねえ」

「何言ってるのさ！幻想郷さいきよーのあたいがあなたなんかに負けるわけがないじゃないか。食らえアイシクルフォー……」

もう一回。

やっぱり砕けた。

いつの間に眠ってたんだろう。

起き上がると目の前にはまだあいつがいる。

弾幕うまく張れなかつたんだろうか。

「さつきあなた潰れたよねえ」

何を言ってるんだろう。

……まあいいや。

とっておきの弾幕で粉々よ！

「コールドスプリンクラー！」

薄暗い地下室の真ん中に直径50センチほどの白く輝く冷気の塊が出現する。

チルノは誇らしげに腕を組んで宣言する。

「ルナティックよ！」

一瞬の間を空けて冷気の塊から次々と氷の欠片が飛び出した。

氷の欠片はテーブルの上のティーカップを叩き割り、壁にぶつかって砕け、赤いベルベットの絨毯を引き裂いた。

額に5センチほどの氷の塊がぶつかってフランドール・スカーレット

トは少し顔をしかめた。

「うわっ！あわわ」

発射した本人が回避のために必死で室内を飛び回るのを見て、やっ
とこれが弾幕ごっこだという事に気がつく。

何百年ぶりかの遊び相手。

フランドールの心に火がついた。嬉しさに目が輝く。血沸き肉躍る。

「きゃーっ！」

突然奇声を上げたフランドールに驚きチルノが動きを止めた。

「レーヴァティーン！」

満面の笑みを浮かべたフランドールが、室内を埋め尽くすほど巨大
な炎の剣を振りかぶる。

「やーっ！」

火の粉を撒き散らして猛スピードで振り下ろされる禁断の剣。

何事か理解する前にチルノは消滅した。

地下室と変わらない薄暗い部屋。

違うのはここが地下ではないこと、扉に特別な鍵が掛かっていない
こと、部屋の主がこの館の主であるレミア・スカーレットである
ことだ。

年季の入った木製の安楽椅子に腰掛け紅茶を飲む彼女の右斜め後ろ
には、『完璧で瀟洒なメイド長』十六夜咲夜が立っている。

暗がりには浮かぶ真紅のカーテン、灰色の壁、真紅の絨毯。揺らめき
伸び縮みする翼の生えた影。

物憂げに紅茶を口に運ぶ少女の横顔を蝟燭の炎が赤々と照らす。

「咲夜、紅茶の用意をなさい。客人よ」

テーブルの向かい側、イマイチ光の届ききっていない暗闇に一筋の
亀裂が入った。

亀裂はだんだん広がり、そして開き、中から『ずるり』といった感

じで八雲紫が現れる。

「ごきげんよう」

「うちの門番は何をやっているのかしら」

忌々しそうに呟いてレミリア・スカレーレットが、いつの間にか机の上に増えている紅茶を勧める。

「門番は侵入できる所を守るものよ。私は侵入できないところから入るから仕方が無いわ」

紅茶には手をつけないで紫は机の上に身を乗り出し肘を突いた。

「随分と可愛い妹ね」

「だから玩具を与えたの？人様の家庭事情に首を突っ込むのは感心しないわ」

「姉妹は仲良くするものよ。特に貴方のような種族は友達が少ないのではないかしら？」

「私を怒らすために来たのでないなら早く本題に入って頂戴」

閉塞的ながらも豪華な造りだった地下室は今や物置部屋と見紛うばかりに荒れ果てていた。

砕けた食器の破片が散らばり、シャンデリアも地に落ち、ベッドは裂かれて羽毛が舞っている。焦げた壁もあれば凍りついた一角もあり、掃除係のメイドが卒倒しそうな有様である。

そんな部屋の真ん中で、背中の瓦礫の感触も気にならないほど疲労した二人が仰向けで寝転がっている。

178戦178KO、フランドール・スカレーレットの勝ち。

八雲紫がのりくらりと本題に入る事をかわしながら世間話を続け

ている間3時間。この地下室で二人はひたすら弾幕ごっこを続けていたのだ。

「……お前……強いな。あたいはチルノ」

「わたしはフラン。フランドール・スカーレットよ」

仰向けに倒れたまま二人はここにきてようやくお互いに名前を名乗った。

「チルノちゃん。次は何して遊ぶ？」

天井を見上げたままフランドール・スカーレットが声を発する。

「っ！あ、あたいが疲れてるわけ無いじゃないか。それじゃあ外で鬼ごっこをしよう」

チルノがふらつく足で飛び起きる。

「わたしだって疲れてないもん！湖ってどこ？鬼ごっこって何？」

よろめきながらフランドール・スカーレットも立ち上がる。

「鬼ごっこも知らないなんて変なやつ。とりあえずここから出よう」
チルノがそう言うとフランドール・スカーレットは悲しそうに目を伏せた。

「わたしはここから出れないの」

目を伏せたまま唯一の出口である封印を施された鉄の扉を指差す。

「もう何百回紅茶とケーキを食べたか分からないわ」

「……ふうん」

チルノは興味な気に相槌を打つと自分の周りに冷気を集中させた。

フランドール・スカーレットが見守る中、チルノは直径2mほどの巨大な雪玉になった。

「このままあたいを転がしてぶつけるのさ。そうすればきつとあのドアも壊れるよ」

雪玉の中からくぐもった声が聞こえる。

「チルノちゃん頭良い！それじゃあ、いくよ」

言うが早いか、フランドール・スカーレットは雪玉を鷲掴むとそのまま扉に向かって走り出した。

そしてそのままの勢いで自分の体ごと雪玉を扉へ叩きつけた……。

扉の破れる音はしなかった。

扉にぶつかつた衝撃も無く、まるでワープでもしたかのようにすり抜けたのだ。

しかし頭のあまりよろしくない妖精と、何百年ぶりかの地下室の外に大興奮の幼い吸血鬼はその事に疑問を抱かなかつた。

「さあ！あたいについて来な！」

「待つてよチルノちゃん！」

妖精と吸血鬼が窓の少ない廊下を矢のように駆け抜ける。

すれ違うメイドを氷漬けにして、ぶつかつたメイドを壁にめり込ませ、2人は玄関を直指した。

銀の一閃。

前方5？。

急停止した2人の目の前にナイフが突き刺さる。

玄関までの10メートルに十六夜咲夜が立ちふさがる。

「妹様、お嬢様からの命令です。部屋にお戻り下さい」

両手の指に挟まれたナイフが照明の光を受けてきらりと光る。

「咲夜！」

「何？誰？」

「敵だよこいつ、チルノちゃん」

「お、おう」

冷やかな眼のメイド長、困惑気味の妖精、真剣な表情の吸血鬼。

「敵とは酷いですね。毎日紅茶とケーキをお作りして差し上げていますのに」

言うと同時に放たれる4本の銀ナイフ。

事も無げに回避する2人。

慣れた手つきで懐中時計を取り出す咲夜。

「ちゃらり、と懐中時計の鎖が鳴る。」

「時符プライベートスクウェア」
世界が色を失った。

赤を基調とした館の内部はモノトーンの世界になり、十六夜咲夜以外の全てが活動を止めている。

「……そして時は動き出す」

チルノの眼から見ると突然。

本当に突然。

大量のナイフに囲まれた。

「うわわわあわあ」

ナイフの雨に四苦八苦する妖精。

「もらったあ」

禁忌『クランベリートラップ』

いつの間にか十六夜咲夜の背後に回っていたフランドール・スカレットが弾幕を張る。

メイド長を囲む真つ赤な弾。

悪魔の果実が急速に輪を縮めて十六夜咲夜を押しつぶすかのように殺到する。

ちゃらり、とまた鎖が鳴る。

弾幕を射出したままの体勢で止まるフランドール・スカレット。

十六夜咲夜は動きを止めた弾幕の隙間を慎重に抜け出し、ナイフを一本セツトした。

空を切る赤い果実。

「え？」

困惑する悪魔の妹に背後から迫る銀のナイフ。

幼いうなじに鋭利な切っ先が届く寸前、それは氷の壁に遮られた。

「何!？」

ナイフを避けきったチルノが得意げに右手で氷の塊を弄んでいる。EXボスとの3時間に渡る弾幕ごっこによりチルノは劇的に進化していた。

「あたいを舐めないでよね。ダイヤモンドブリザード!」

両手を突き出された両手から大量の冷氣と氷塊が飛び出す。
格下と見ていた妖精の意外な力に戸惑う十六夜咲夜。

「くっ」

再び懐中時計を取り出そうとして手を滑らす。指の間をすり抜ける
懐中時計。完璧な彼女らしからぬ失敗。

吹雪と一緒に壁に叩きつけられた。

痛む背中をさすりながら顔を上げると火炎の大剣を振りかぶる吸血
鬼。

浮遊感。

重力。

落下。

生きているのは幻想郷の住人だから……。

「夕食までには帰ってきてくださいねええ……」

声を背に妖精と吸血鬼は外へと飛び出す。

その顔はどちらも晴れやか。

日光を遮る濃霧、吸血鬼日和。

「散々だったわね、咲夜」

部屋に一つしかない小さな窓から身を乗り出したままレミリア・ス
カーレットが声をかける。

「お嬢様、勝てない運命なら先にそう仰って下さいよ」
満身創痍の十六夜咲夜。

薄暗い部屋。外から聞こえる妖精たちと門番と妹の声。

「貴方が本気を出さなければ面白くないもの」

指先から霧を出しつつ赤い悪魔は答える。

八雲紫が何を考えてあの妖精と妹を出会わせたのか。何故妹の脱走を手助けしたのか。

何か裏があるような気もするが、初めて見る外で友達と楽しそうに遊ぶ妹の姿は悪くない。

「咲夜、日光を遮っておいて頂戴」

「流石に無理ですよ」

「私も混ざってくるわ」

「お嬢様!？」

(後書き)

感想ください。切実に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6262j/>

おてんば恋娘達の冒険

2010年10月17日03時54分発行